2Qp-3　乳児の摂食機能の縦断観察および物性測定値に基づく離乳食の検討

○中澤　弥子　東京大医

【目的】 摂食機能の発達をふまえた離乳食の内容およびその進め方について検討する一環として、演者は健常乳児の摂食機能の縦断観察を行い、離乳食による摂食機能の発達への影響および発達の個人差について報告してきた。今回は、縦断観察対象が与えられていた離乳食の物性測定結果も合わせて、離乳食の調理法および進め方について検討した。
【方法】1．摂食機能の縦断観察：対象は東京都内の乳児保育所に在園する健常乳児 19 名（男児８名,女児 11 名）である。保育所で離乳食を開始した月齢（生後 5.0－6.0 ヵ月）から生後 12 ヵ月まで、約２週間間隔で摂食場面の観察を行った。調査項目は先行研究を参考にし、摂食状況および摂食機能の発達状況を食品毎に観察した。２．物性測定：乳児保育所で頻繁に与えられている離乳食約 60 品目を選択し、（株）山電製クリープメータを用い、厚生省による高齢者用食品の試験法に基づき硬さを測定した。
【結果】乳児が咀嚼運動（歯ぐきかみ）を開始した離乳食は、ゆで野菜の約 1cm 角（硬さ：人参 $2.8\times10^5\pm0.5$N/m^2, 大根 $2.5\times10^5\pm0.5$N/m^2）であった。離乳中期において、乳児はゆで野菜や果物の角切りなどに対し咀嚼運動を行い、おかゆ（硬さ：$6.0\times10^3\pm0.5$ N/m^2）に対しては咀嚼運動を行わず舌の上下運動で食べた。麺類は離乳中期以降から与えられ始めていたが、よくかまないで飲み込む乳児が半数以上認められた（離乳後期のべ観察総数=104 名中 54.8%）。ゆで野菜やパンをスティック状にした離乳食は、平均 7.8 ±0.6 ヵ月から与えられ初め、乳児が介助されることなく自分の手で握って噛みとって食べられるようになったのは平均 8.5±0.9 ヵ月であった。